

2016 年度の英語学研究会（堀田ゼミ） に関する連絡と春休みの課題

2016 年 1 月 19 日

堀田 隆一

1. 2016 年度の「英語学研究会」は木曜 5 限となる見込みです。また、その直前の木曜 4 限には「英語学演習 III/IV」が入る予定です。ゼミ生は原則として木曜 4 限と 5 限の 2 時限を連続して受講してください。
 - (a) 木 4 「英語学演習」では、以下の英語史の古典的名著を 1 年間かけて講読し、学生による発表と議論により授業を進めます。授業に先立って、読んでおくことを勧めます。

Baugh, Albert C., and Thomas Cable. *A History of the English Language*. 6th ed. London: Routledge, 2013. (ISBN: 9780205229390)
 - (b) 木 5 「英語学研究会」では、個人研究発表（プレゼンテーション）を中心とした授業を進めます。
 - (c) ちなみに、2016 年度は英語史関係ではほかに月曜 2 限に唐澤一友先生による授業（春は英語史全般、秋は特に近現代の英語変種について）が予定されていますので、ぜひ積極的に受講を計画してください。
2. 現 3 年生について、本年度の秋学期末に提出したレポートは、コメントを付けた上で、春休み中に原則として電子メールで返却します（メールアドレスを知らせておいてください）。
3. 春休み中の課題
 - (a) 現 3 年生は自らの個人研究について、学期末に提出したレポートにおいて自ら設定した課題をこなしてください。現 2 年生は、下記の課題図書を読みながら個人研究の課題の候補をいくつか選んでおいて下さい。いずれの学年の学生も、新年度の 4 月の授業でその成果を報告してもらいます。
 - (b) いずれの学年の学生も、課題図書一覧（別頁）に挙げられている図書を計 3 冊以上選び、読んでください（うち 1 冊は卒業論文研究の進め方についての和書で「必須図書」。他の 2 冊（以上）は英語で書かれた英語史概説書で「選択図書」より要選択）。特に興味をもった点（参照頁、引用あるいは要約、及びそれ

に対する自分のコメントや疑問)をメモしながら読み,読了後は,各図書(必須図書も含む)について A4 用紙表裏 1 枚以上でそれら数十点ほどを箇条書きで整理し,これを「読書メモ」(A4 用紙で 3 枚以上となるはず)として新年度の 4 月の最初の授業で提出してもらいます。記述言語は日本語でも英語でも可です。目的は,対話的読書を通じて,各自が英語(史)についてどのような問題にとりわけ関心があるのかを発見し,開拓していくことです。

「読書メモ」の例 (Smith, Jeremy J. *An Historical Study of English: Function, Form and Change*. London: Routledge, 1996. を読んで)

- p. xi: 本書の目的は,(1) 英語歴史言語学の目的を考える契機を与える (root-disturbance), (2) その方法論をうち立てる,(3) 言語変化の how だけでなく why を追究する (historiography) ことにある。[コメント:全体として Samuels の理論の上に乗る,それを最新の研究に基づく具体例によって accessible に提示しているという感がある]
- p. 6: history vs chronicle, historiography vs chronicle-making, diachronic vs synchronic (snapshots) [歴史言語学を歴史学に喩えていくつかの対立項を明示している。ほかにも,linguistics vs philology, theory vs data という対立も考えられるか。]
- p. 52: “Linguistic change may rather be regarded . . . as driven, like biological evolution, by a ‘blind watchmaker’: apparent direction is the result of interactive reinforcement between variables at every level of language.” [変化には目的はなく,見かけの方向はあくまで諸変項の相互作用の結果だとする見解]
- p. 111: “the multifactorial causation of events needs to be an accepted part of the methodology of historical linguistics” (111). [大母音推移の原因論のまとめとして,言語変化の原因は多くの要因によって求められなければならないとしている]
- p. 132: 3 人称代名詞が h- 系列から th- 系列に変わったのはまず主格が最初だという。その理由は,“since the theme of a text — the central piece of information which a text tries to put across — is usually focused upon the subject of the sentence or clause.”
-
-

課題図書一覧

以下より，必須図書 1 冊を含め，計 3 冊以上を選び，読んでください．選択図書には簡単な注をつけておきます．

1. 必須図書

- 鹿島 茂 (著) 『勝つための論文の書き方』 文藝春秋 文春新書，2003 年．

2. 選択図書

- Algeo, John, and Thomas Pyles. *The Origins and Development of the English Language*. 5th ed. Boston: Thomson Wadsworth, 2005. (標準的な概説書の 1 つ)
- Bradley, Henry. *The Making of English*. London: Macmillan, 1955. (古典的名著の 1 つで洞察に富む)
- Bragg, Melvyn. *The Adventure of English*. New York: Arcade, 2003. (物語口調で読みやすい英語史)
- Brinton, Laurel J. and Leslie K. Arnovick. *The English Language: A Linguistic History*. Oxford: Oxford University Press, 2006. (言語学的な視点が強く押し出されている)
- Crystal, David. *The Stories of English*. London: Penguin, 2005. (かなり長いが興味深い逸話に富む)
- Fennell, Barbara A. *A History of English: A Sociolinguistic Approach*. Maldon, MA: Blackwell, 2001. (社会言語学的な観点からの英語の通史)
- Gelderen, Elly van. *A History of the English Language*. Amsterdam, John Benjamins, 2006. (言語学・英語学の知識もある程度必要)
- Gooden, Philip. *The Story of English: How the English Language Conquered the World*. London: Quercus, 2011. (読み物として書かれた簡易な通史)
- Gramley, Stephan. *The History of English: An Introduction*. Abingdon: Routledge, 2012. (ウェブ・リソースへのリンクの多い，教科書らしい英語史)
- Jespersen, Otto. *Growth and Structure of the English Language*. 10th ed. Chicago: University of Chicago, 1982. (古典的名著の 1 つで，外面史の記述に定評がある)

- Knowles, Gerry. *A Cultural History of the English Language*. London: Arnold, 1997. (社会言語学的な視点からの英語史)
- McCrum, Robert, Willam Cran, and Robert MacNeil. *The Story of English*. 3rd rev. ed. London: Penguin, 2003. (英語の歴史とともに英語の変種についても詳しい)
- McIntyre Dan. *History of English: A Resource Book for Students*. London: Routledge, 2009. (テーマ別, 習熟度別に章立てされており, 学習しやすい)
- Schmitt, Norbert, and Richard Marsden. *Why Is English Like That?* Ann Arbor, Mich.: University of Michigan Press, 2006. (英語教員を目指す学生向けの英語史)
- Smith, Jeremy J. *An Historical Study of English: Function, Form and Change*. London: Routledge, 1996. (歴史英語学の理論書で, やや難易度が高い)
- Strang, Barbara M. H. *A History of English*. London: Methuen, 1970. (構造言語学に則った遡及的英語史記述の名著)
- Svartvik, Jan, and Geoffrey Leech. *English: One Tongue, Many Voices*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006. (現代英語を意識した読みやすい英語史)
- Williams, Joseph M. *Origins of the English Language: A Social and Linguistic History*. New York: Free Press, 1975. (理論言語学と社会言語学のバランスの取れた英語史)

その他, 課題図書一覧には掲載していませんが, 英語史の理解のために <http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hello/2013-04-11-1.html> の和洋図書一覧や, そこに張ったリンク先の参考文献も目を通しておくことを勧めます.